

【連載：「私の好きなこの一曲」 Vol.3】

What a wonderful world

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

前回のこの連載からの2か月の間に、世界中の様相が激変した。新型コロナウイルスは容赦なく人類に襲い掛かり、そのパンデミックにより命を落とされた方々や感染で苦しまれた方々が想像を絶する数に達した。皆が家にいて、人と距離をおき、行動も言葉も少なくなった。私も在宅勤務が続き、日頃は忙しくて家の中で時間をかけられないことをたくさん実行した。もちろん、音楽を聴く時間も増えて、私が幼い頃に、リビングルームに置かれたステレオで、父親がよくレコードをかけてくれたことを懐かしく思い出しました。昔のレコードも引っ張り出して聴いた。ゆっくりと時間が流れて、ゆっくりと音楽を楽しむ。こういう時間の流れ方は、ずいぶんご無沙汰していたと実感し、同時に反省もした。

昔、父親がかけてくれたレコードは、ジャズだったり、クラシックだったり、映画音楽だったり、様々なジャンルで、私はそのどれもこれもを楽しく聴きながら、曲の解説を読んで作曲された時代の環境や、演奏家の暮らしなどに想像を膨らませていた。そのよく聴いていた1曲に、サッチモことルイ・アームストロングの歌う「What a wonderful world」があった。サッチモの声は独特で個性的で、そして幼い私の心をあたたかく包み込むような、父親の優しさのような、そんな感じがして大好きだった。ディズニー映画のテーマソングを歌うサッチモも大好きだったが、「What a wonderful world」は、その後もずっと私の愛する曲となった。



shutterstock.com • 460651804

2018年11月に、大阪・関西万博の誘致のための最終プレゼンテーションがパリで開催され、私はそのプレゼンターとして登壇した。SDGsに関するスピーチをすると同時に、日本チームの全員が歌う曲の演奏者、伴奏者としての役割も担った。内閣官房参与の谷口智彦先生と打ち合わせをしたときに、万博誘致の最後の決戦の場で、公式の国際会議で、どんな曲を演奏するのがふさわしいのか、と考えたその結果が「What a wonderful world」。奇しくも、谷口先生も同じ曲を構想されていた。

実際に、この曲を日本チームのプレゼンテーションに使えるようになるまでには、スタッフの方々の様々なご苦勞があった。この曲の著作権をもつ団体がアメリカにあり、アメリカまで演奏許諾の交渉に行かれたとき、最初は「日本という一国の利益のために、この曲を使わせるわけにはいかない」と断られたという。しかし、スタッフチームの「これは、日本だけの利益のために演奏するのではない。世界の心が一つになるために、一番ふさわしい曲として演奏するのだ」という言葉と、粘り強い交渉の結果、ついに許諾された、というストーリーが背景にあるのだ。プレゼン当日、国際会議場の前面スクリーンに大きく映し出された世界中の人々の笑顔と歌声に合わせて、私がピアノを演奏し歌う。そして日本チームも全員がステージに上がって一緒に歌う。一人で歌いだしたイントロが最後には大合唱となり、国際会議場にいる百数十カ国の代表の方々と一体感すら生まれて、この曲がもつパワーをあらためて認識した。

私はこれまで、何百回とライブを重ねてきたが、たぶんこの曲を弾く回数がダントツに一番だと思う。歌詞の素晴らしさと、メロディーとハーモニーの美しさ、これからもずっと演奏し続けて、人々を元気づけたり、励ましたり、癒したりしていければ、私自身も幸せである。